



# ドアの向こう



奈良春水

## ドアの向こう

---

「ただいま」

金曜日の夜、私が家に帰るなや否やリビングのドアが勢いよく開き、娘の綾乃が目を赤く腫らしながら出てきて、今度は勢いよくドアを閉める。

ピシャンッ。

そして自分の部屋がある2階へドスドスと音を立てながら上がっていった。

おいおい、どうしたんだ？

私が突然のことにうろたえながらリビングに入ると、妻が無然とした表情でいた。

「綾乃と何かあったのか？」

「知らないわよ」

「知らないってことはないだろ。じゃあ、なんで綾乃は怒ってるんだ？」

「だから、知らないわよ。私が、テレビのチャンネル変えていいって聞いただけなのに、あの子ったら、うるさいっだの、うざいっだの、急に怒鳴り出して、なんなのよ、まったく」

おいおい、本当にどうしちゃったんだ？綾乃は。

そんなことで怒り出すことがそもそもおかしい。

いや、待てよ。綾乃ももう中学生だ。反抗期だ。親の言うことがいちいち癪に障るのかもしれない。

いや、でも、急に怒り出すのはやっぱりおかしいな。

そんなことを考えていた私の胸の内を悟ったのか、妻が「あなたが考えても無駄よ。それに、あの子とろくに話もしてないじゃない」と軽く睨む。実は私が一番気にしていたことを言われてしまった。

最近仕事は忙しくて、綾乃とはあまり顔を合わせていない。いや、たとえ顔を合わせていても何を話せばいいのかわからない。でも、ここは一つ父親として頑張るしかない。

そう奮起した私だったが、これまた妻に見抜かれて「たまには父親らしく、とか思ってるんでしょ。だから無駄よ。母親の私であんな調子なんだから、あなたが何か言ったら、本当にあの子に嫌われちゃうだけよ」なんて恐ろしいことまで言われてしまった。

「いや、でも、このまま放っとく訳にもいかないしな。まあ、怒った理由くらいは聞き出してみせるよ」

「あっそ、勝手にすれば」

それだけ言って、妻はテレビをNHKに変えてご飯の続きを食べ始めた。

大丈夫だ。父親と年頃の娘だけど、結局は父と子だ。親子だ。話せばわかるさ。

私は背広を脱いでワイシャツ姿になり、さらに腕まくりまでして、2階にいる綾乃と話す態勢を整えた。

甘かった。

私は綾乃の部屋の前で立ちつくしてしまった。言葉が出てこない。さっき階段を上りながら話

す言葉も決めてあったのだが、今はそれが喉から先へは出てきそうにない。

それに、なんだこの圧迫感。緊張感。ドアをロックすることもできない。思春期の娘の部屋に入って話そうと思うほど無神経な親ではないが、とにかく息が詰まりそうだ。

でも、ダメだ。ここで引き返しては、絶対にダメだ。そもそも、綾乃はもう気配で私がいることに気付いているかもしれない。だったら、ここで引き返したらかえって怪しまれるだけだ。仕方ない。こうなったらぶっつけ本番だ。とにかく話すしかない。

私は何度かゆっくり深呼吸をしてから、ドアの向こうにいる綾乃に話しかける。

「なあ、綾乃？いま、ちょっといいか？」

部屋の中で動く気配が伝わった。だが返事はない。私は返事がないことはOKなのだ勝手に解釈して、次の言葉を発しようとする。

「まあ、なんだ・・・」

急に怒って、どうしたんだ？

「だから、その・・・」

なにか学校で嫌なことでもあったのか？

「あのな、えーと・・・」

いや、いいんだ。言いたくなければ。そういう時もあるよな。まあ、困ったことがあればお母さんやお父さんに遠慮なく言ってくれよ。

「・・・うん、あのな。綾乃、元気か？お父さん、今日仕事で失敗しちゃってさ。もう大変だったんだよ。でも、さっき帰って来るときに我が家に明かりが灯ってるのを見たんだよ。まあ、綾乃やお母さんがいるから当たり前なんだけどな。で、それ見てたら、なんかいいなあって、癒されるなあって、そう、元気が出たんだよ。だから、綾乃も元気で頑張れ。お父さんは、元氣だぞお」

なんだ、それ。

私は自分で言うとおきながらあきれた。そもそも言っていることがめちゃくちゃだ。何を伝えようとしているのか、全くわからない。

でも、そんな私の言葉が可笑しかったのか、一瞬部屋の空気がふわっと緩んだのがわかった。そして「何それ？全然意味分かんないんだけど」と綾乃がドアの向こうでつぶやいた。

「そうだよな。ちょっと可笑しかったな。お父さん、何言ってるんだろうなあ。あはははは・・・」

なんだか恥ずかしくなりその場にいても立ってもいられなくなった私は、慌てて部屋の前を離れて階段を下りた。

でも、なんだか悪くない気分だった。それに久しぶりだった。綾乃言葉を交わすのは。たった一往復の会話だったけど、とにかくよかった。まるで湯船に浸かった時みたいに全身がほっこりしてきた。

目が覚めるとソファーにいた。どうやら昨日はリビングで寝てしまっただけらしい。時計を見ると午前10時を回っていた。

まあ、いいか。休日だし。

私はそう思い、大きく伸びをする。すると妻がその動きで気づいたのか「起きたの？朝ご飯、あなたの分作ってないけど、どうする？いまから作ろうか？」と声をかけてきた。

「いや、いま食べてもすぐお昼だから。あ、でも、みそ汁くらいは飲もうかな」

「昨日の残りだけど、いい？」

「いいよ」

妻がみそ汁を鍋で温め直しているうちに、私はソファから起き上がり食卓に移動する。

昨日綾乃と話した後は、リビングにいた妻とも特に話さずに寝てしまった。疲れていたのだろう。仕事のことはもちろんだが、綾乃のことでも。

食卓につくと目の前にメモ用紙が置いてあった。よく見ると、紙の真ん中あたりにまるっこい字で「おと一さん、昨日はありがと。あと、心配かけてごめんなさい。」とだけ書いてあった。

そんな綾乃の書いた文字を見ながら私は席につき、思う。

なんだ、機嫌直ったのか。

妻がみそ汁を運んできてくれた。

「まあ、綾乃のことは、とりあえず大丈夫そうだな」

私がそう声をかけると、妻は少し困ったように笑った。

「なに？また、なにかあったのか？」

「そういうわけじゃないけど」

「じゃあ、なんなんだ？」

「今朝、綾乃と話したんだけど、怒った理由はどうしても言わないのよ、あの子。ただ、もう大丈夫だから、昨日はごめんなさいって笑って言うだけ。ちょっと心配になったから、どうにか聞き出そうとしてもダメで、絶対言おうとしないのよ」

なんなんだ、おい。

私の中に、昨日以上に不安が募ってしまう。

いじめ。つい、そんな言葉まで浮かんでしまう。そういえば最近よくテレビに出ている教育評論家が「いじめられている子どもは、それを親に知られたくないから、親の前ではわざと明るく振る舞う」なんてことを言っていたような・・・

私はみそ汁を一杯飲んでから、恐る恐る「まさか学校でいじめに遭ってるんじゃないか？」と聞いた。でも妻は拍子抜けしたように「それは無いわよ」と笑った。

「どうしてもわかるんだよ。怒った理由言わないなんて、やっぱりおかしいし。いじめの可能性も」

「だ、か、ら、それは大丈夫なのよ」

妻は幼い子どもを諭すようにゆっくりとした口調で言い、また笑った。

それでも心配な私は「それで、綾乃は今どうしてるんだ？部屋にいるのか？」と聞いて、またみそ汁を飲む。

それを見ていた妻が、ワンテンポ遅れて「彼氏とデートだって。さっき出かけて行ったわよ」と言った。

私は飲んでいたみそ汁でむせそうになる。

ちょっと待て。まだ中学生だぞ、おい。彼氏は早いんじゃないか、彼氏は・・・いや、中学生だから、彼氏くらい・・・いるのか？

そんな慌てた私を見て、妻が「嘘よ。冗談よ。今朝、アカリちゃんとナミちゃんが家に遊びに来て、今は図書館で勉強してるわよ。昨日約束したんだって。綾乃も楽しそうだったわよ」とおかしそうに笑った。

なんだ、そうなのかよ。びっくりさせるなよ。

「だから、いじめの可能性は低いわね」

確かに。アカリちゃんとナミちゃんは、綾乃の小学校からの友だちだ。休日はよく家に遊びに来ている。そんな二人と仲良くするってことは、いじめられている可能性は低いだろう。

「だったら、ホントになんだったんだろうなあ、昨日は」

「さあね、私に訊かれても。とにかく、機嫌が直ったんだからよかったじゃない」

「そうなんだけどさあ」

「まあ、難しい年頃だからね」

「そうなんだよなあ」

妻との間でそんな言葉が飛び交う。

なんだか二流のホームドラマみたいだな。

そう思い、私はまたみそ汁を飲んだ。

でも、これから更に難しくなっちゃうよなあ、綾乃は。特に、年頃の娘と父親なんてのは水と油みたいなもんだからなあ。綾乃は俺と話すのも嫌なんだろうなあ。なんか、父親って寂しいなあ。

あ、でも、昨日話したか。まあ、会話と呼べるようなものじゃなかったけど、とにかく話したか。まあ、今はそれでよしとするかなあ。

娘のことばかり考えていた私は、だから今度は本当にみそ汁でむせてしまった。

(完)